

櫻井本『夢想之連歌』訳注(二)

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうち二番目の百韻である『夢想之連歌』の訳注を試みており、本稿では、百韻の発句から第十九句までを注釈する。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の『夢想之連歌』である。対校本は次の諸本を参照している(ゴシック体は略号である)。「櫻井本『夢想之連歌』訳注(一)」に諸本の説明をなしているので、必要に依り参照されたい。

- ①早 早大伊地知文庫『古連歌』本(文庫20/26)
- ②書 書陵部『古連歌集』本(353-41)
- ③大 大阪天満宮『名家連歌』本(大阪天満宮文庫69-25-1)
- ④夢 東大国文学研究室蔵本(中世12-7-2)

- ⑤ 歴 国立歴史民族博物館高松宮旧蔵本 (H-600-1486 △函181)
- ⑥ 宗 書陵部『宗祇独吟連歌』本 (154・515)
- ⑦ 北 北海学園大学北駕文庫本 (文 365)
- ⑧ 東 東大国文学研究室蔵『連歌名句』本 (D 1613)
- ⑨ 広 広島大学福井文庫本 (国文/5051/N 70)
- ⑩ 静 静嘉堂文庫本 (連歌集書29所収本)
- ⑪ 甲 大阪天満宮 (れー甲ー6) 本
- ⑫ 小 小松天満宮蔵『集懷紙』本
- ⑬ 滋 大阪天満宮滋岡文庫本 (れー5ー34)
- ⑭ 鳥 太宰府天満宮蔵小鳥居家本 (連歌74ー72)
- ⑮ 天 天理図書館綿屋文庫本 (れ4・2ー41)

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻(二)櫻井本『夢想之連歌』訳注(二)付翻刻(二)愛知県立大学日本文化学部論集』第十一号・二〇二〇・三)を適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、【校異】においては、底本の翻刻に対して、前掲対校本の番号により、校異を示した。表記による違いはとらな
い。また、⑬の右傍に存する、読みにくい文字の読みがなと見られる書き直しの朱書きは校異に入れないが、異

本注記と思われる朱書きは校異に入れている。また、⑧には式目関係の頭注が存するが、校異には入れず、必要に応じて訳注で触れることとする。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのような作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

【各伝本の百韻に関する内題の校異】

底本 夢想之連歌

- ①⑩夢想 ②夢想 宗祇独吟 ③独吟賦山何連歌／宗祇 ④宗祇夢想独吟 ⑤⑥ナシ ⑦⑧夢想住吉法楽祇公独吟 ⑨住吉参籠之時自脇独吟／夢想 ⑩住吉参籠之時自脇独吟／夢想 ⑪夢想之連歌／宗祇 ⑫夢想之連歌^{第三}より 宗祇
 ⑬夢想之連歌／宗祇(朱にて「宗祇」を消し、左に「御」) ⑭夢想 独吟 ⑮延徳二年九月／賦夢想連歌／独吟／宗祇

(初折・表・一)

一 住吉の松こそ道のしるべなれ

【校異】 ⑦⑧⑨⑩：句の下に「御」

【式目】 雑 住吉（神祇・名所） 松与松（可隔七句物）

【語釈】 ○住吉：撰津国の歌枕。現在の大阪市住吉区。「住吉の松のあらしもかすむなりとほごとをのはるのあけぼの」（新勅撰集・春上・守覚法親王家に五十首歌よみ侍りけるに、春歌・覚延法師・14）。この地に二十二社の一つであり、撰津国一之宮でもある、住吉大社（大阪市住吉区住吉二丁目）がある。祭神である住吉明神は、和歌の神として特に崇拜され奉納和歌・連歌も多い。宗祇も文正元年（一四六六）五月に、東国下向に先立って住吉に詣でており、文明十八年（一四八六）二月にも参籠している。○住吉の松：住吉の海岸に生える松。住吉明神を暗示する。住吉明神に対して和歌・連歌の上達を願い、歌道の興隆を祈願する際、長寿を保つ松を住吉の神の象徴として詠む。「我がみちをまもらば君をまもるらむよはひはゆづれ住吉の松」（新古今集・賀・千五百番歌合に・藤原定家・739）。「身にかくる衣の玉をいつかみん／ことのはちぎるすみよしの松」（表佐千句追加・宗祇／俊重・17／18）。「むかししる心計をたよりにて／この道いのるすみよしの松」（老葉（毛利本）・1557／1558）。○道：和歌の道。○しるべ：道案内、教え導くたより。「心ぞしるべ世の中の道／仏より先に教へし主や誰」（新撰菟玖波集・釈教・3521／3522・贈従三位教弘）。

【現代語訳】 ここ住吉には、歌の道を守る住吉明神が鎮座され、そこに至る道にある松の姿こそは、歌の道をたどり連歌を極めていく、そのための道しるべとなっているのだ。

【考察】 語釈（○住吉の松）に引用した老葉¹⁵⁵⁸番句は、『愚句老葉』において、「へ我とハ、神代のことをかたらなむむかしをしれる住よしの松 此心也、老の波を岸によせても、道ハいのらまほしきのミ也」と注されている。自注で引用したのは、神代のこともよく知っている住吉の松に、昔のことを尋ねたいとする歌「我とはば神よのこともかたらなむむかしをしれるすみよしのまつ」（拾遺抄・雑上・436・惠京法師）であり、宗祇はたゆむことなく歌道を学ぶことをよすがとして、連歌の上達を願っていた。ここからも、また序（櫻井本『夢想之連歌』訳注（一）付翻刻）

参照)からも、発句に込められた、連歌の道を極めるため、努力し続けようとする宗祇の気持ちは明らかであろう。

なお、この発句は、序に記すように、前年(延徳元年)の厳冬の夢に「さまことなる人」から与えられた句であり、神詠の形を取る夢想の発句である。それゆえ、賦物はない。前年三月には、將軍足利義尚が没し、宗祇は山口に下向、上京した九月には三条西実隆と和歌打聞の計画を相談、十二月には連歌会所奉行を辞す。打聞は実現せず、宗祇の失意の念が、自ずから夢想の句になったものか。

序によれば、宗祇はこの句を与えられ、すぐに脇をつけたので、脇は冬の句であり、以後冬から展開する。

(初折・表・二) 住吉の松こそ道のしるべなれ

二 遠里(とほざとをの)小野の雪のかへるさ

【校異】底本、⑦⑧⑨⑩⑭：句の下に「宗祇」⑪⑬：句の下に朱にて「宗祇」⑧に頭注「遠里小野 撰州ノ名所也一 所ノ名也」あり

【式目】冬(雪) 雪三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也(降物・一座四句物・可隔三句物)

【語釈】○遠里(とほざとをの)小野：撰津国の歌枕。現在は大阪市住吉区遠里小野(おりおの)と、堺市遠里小野(おりおの)町一帯を指す。宝永年間の新大和川開削により、南北に分かれた。古くは「とおざとおの」と発音し、和歌・連歌においても「とおざとおの」で詠まれる。「俗にはをりをのともいへり」(類聚名物考)。「住吉の遠里小野のま榛もち摺れる衣の盛り過ぎ行く」(万葉集卷七・雑歌・115)。「遠里小野」で、冬の季節を詠む歌は珍しい。「津の国のとほ里をの萩がえに雪の花さく冬はぎにけり」(拾玉集・賦百字百首・はつゆき・1260)。「住よしや遠里小野の霞日に／ことは心の花も手向つ」(文安月千句第五百韻・53／54・盛家／良珍)。「住よしやとをさとをの、雪の暮／伊駒のたけに月やいつらん」(桜井基佐句集(書陵部蔵斑山文庫本)・407／408)。○雪のかへるさ：雪の降る中の帰り道。「友とやきかん千とりなくなり／山かけの雪のかへるさ船さして」(老葉(毛利家本)・571／572)。

【付合】「住吉」に「遠里小野」をつけた。「一、遠里小野、是は住吉に有。住吉の句あらば遠里小野付べし」(梵灯庵袖下集)。

【二句立】遠里小野の、雪が降る中の帰り道。

【現代語訳】住吉の岸の松だけが道しるべとして見えているのだ、この遠里小野に雪が降りしきっている、神社からの帰り道では。

(初折・表・三) 遠里小野(とほざとをの)の雪のかへるさ

三 舟よする浜辺の真砂月冴えて

【校異】①⑫：句の下に「宗祇」 さえて③⑤⑥⑬：さへて

【式目】冬(月冴えて)・夜分(月) 冬月(只一／有明一一座二句物) 舟(水辺・体用之外(新式今案)) 冴与寒(可嫌打越物(新式今案))

【語釈】○真砂：砂の美称。「またふけぬ夜半もさえる程みえてまさこにこぼる冬の月かけ」(権大納言俊光集・冬月・368)。「浜トアラバ、まさこ」「水辺のゝき所、まさこ」「沙トアラバ、まさこともいさこともいふ。…浜…白」(連珠合璧集)。○月冴えて：月が凍てつくように冷たく空に見えて。また、月が真砂に白く照り映える様も表す。「冬の心、霜：月さむし(月こぼる 在明以下同也)」(連珠合璧集)。「浦よりたつや友千鳥なる／雲を出まさこに月や氷らん」(看聞日記紙背心永三十一年九月二十七日賦何船連歌・慶寿丸／重有朝臣・20／21)。

【付合】前句は雪で白一色であるが、付句も、白砂と、空にありまた砂にも照り映える月光との、白々とした光景をつけた。

【一句立】舟を寄せる浜辺の砂には、月が照り映え、空には月が凍てつくように冴え冴えと光っていて。

【現代語訳】遠里小野の雪が降った帰り道。舟を寄せる浜辺の砂には、月が照り映え、また空には月が凍てつくよう

に冴え冴えと光っていて。

(初折・表・四) 舟よする浜辺の真砂月冴えて

四 声もむらむら千鳥鳴くなり

【校異】⑧ (上部余白に「・衛冬也鴈霧を結ては秋也」と注あり) ⑬聲

【式目】冬(千鳥) 千鳥(水辺・用) 千鳥(雁に結びては秋也) (新式今案) 「千鳥：以上体用外也」「冬の心 千鳥」(連珠合璧集) 鳥与鳥(可隔五句物)

【語釈】○むらむら…：ここかしこにある様子。まだらな様子。千鳥がここかしこにいるのに加え、鳴き声もあちこちから、ばらばらに聞こえる様をいう。「群千鳥」と掛けて使用している。千鳥の声に「むらむら」と形容する和歌や連歌の用例は、他には以下の例が管見に入るのみである。「あけわたるきりのたえまのわたのはら／あきのちどりのむらむらになく」(天文二十四年紹巴亡父追善千句第七百韻・61/62)。

【付合】夜の浜に千鳥を付けた。「浜トアラバ、千鳥」「千鳥トアラバ、海河にあり」(連珠合璧集)。

【一句立】千鳥は、そこここに群れをなしているだけでなく、声もあちこちからばらばらに聞こえてくるようだ。

【現代語訳】舟を寄せる浜辺の砂には、月が凍てつくように冴え冴えと光り、そこそこに千鳥が群れ、その鳴き声もあちらこちらからばらばらに聞こえてくる。

(初折・表・五) 声もむらむら千鳥鳴くなり

五 わが門の稲葉色づき吹く風に

【校異】色付ふく風に：①色付念風に・②色付く秋かせに・④色つく秋の風に(稿者注「の」に棒線あり)

【式目】秋(稲葉) 門(居所・体) 稲葉(をしねと云かへて又あるべし) (植物・一座二句物(肖柏追加)) 風(吹物)

風与風(可隔五句物)

【語釈】○わが門の…私の家のあたりの。「わがかどのいなばの風におどろけばきりのあなたに初雁の声」(玉葉集・秋上・正治二年百首歌たてまつりける時・578・式子内親王)。○稲葉色づき…稲の葉が色づいて。「山もとのむかひのわさだ見渡せば稲葉色づき秋風ぞ吹く」(信実集・経のれうしの百首に・49)。「苜しほのいな葉色つき吹風に／尾花はのこる野への冬かれ」(看聞日記紙背応永十八年八月二十一日賦何人連歌・新／椎野・83／84)。○吹く風に…吹いてくる風によって、稲葉が色づき、千鳥の声も運ばれてくる。

【付合】門田の情景を付けることで、稲葉を色づかせる秋風と、千鳥の声を運ぶ風とをつないでいる。

【一句立】私の家の門のあたりの稲葉が色づき、その葉を渡って吹く風に。「ゆふさればかどたのいな葉おとづれてあしのまろ屋に秋風ぞふく」(金葉集二度本・秋・師賢朝臣の梅津に人人まかりて田家秋風といへることをよめる・大納言経信・173)。

【現代語訳】ここに千鳥が群れ、その泣き声もあちらこちらからばらばらに聞こえてくる。私の家の門のあたりの稲葉が色づき、その葉を渡って吹く風に、千鳥の声が運ばれて。

(初折・表・六) わが門の稲葉色づき吹く風に

六 垣ほをあらみ薄散る垣

【校異】あらみ…^荒あらみ

【式目】秋(薄) 垣ほ(居所・体) 薄(只一、尾花一、すぐろ、ほやなど云て二)(植物・一座三句物)

【語釈】○垣ほをあらみ…「垣ほ」は、高くそば立つ垣。「あら」は「粗」または「荒」。いずれの字であっても、垣根のつくりが粗雑であること。高い垣根の網目の隙間が空いているので、隙間からは風が通りすぎる。「古郷の垣ほをあらみさよ枕声も隔すうつころもかな」(蒲生智閑和歌集・隣擣衣・416)。なお、⑧は、「あらみ」とし、上部余白

に「・荒 あらす心」と注するが、前句「風に」では「荒らす」は意味が通らない。○薄散る頃…「薄散る」は、すすきの穂が飛散すること。「すすきちる秋の野風のいかならんよるなくむしの声ぞさむけき」(夫木抄・薄・土御門院・438)。「すすきちる夜の風のさひしき／＼きり／＼すかたふく月に声更て」(河越千句第一百韻・修茂／宗祇・70／71、後に萱草498／499、老葉421／422に入る)。「色かはす袖や小萩ににほふらん／霧のほのかにすすきちるころ」(河越千句第三百韻・義藤／宗祇・7／8)。

【付合】門田を渡ってきた風が、垣根を抜けて家に入り込み、庭のすすきの穂を散らすさまを付けた。前句から源経信歌(五の【一句立】参照)の粗末な庵が思われる。

【一句立】垣根が粗く、垣を通り過ぎた風によってすすきの穂が散る、そんな時期がきた。

【現代語訳】我家の門田の稲葉を色付かせ、吹いてくる風。垣根が粗いゆえ、通り過ぎてくる風によって、すすきの穂が散る、そんな時期がきた。

(初折・表・七) 垣ほをあらみ薄散る頃

七 暮深き露のかよひ路跡絶えて

【校異】露…⑭露(霜)と書き誤り、右傍に同一の大ききで「露」と訂正) 跡たえて…③あらはにて

【式目】秋(露) 露(降物・可隔三句物) 恋(かよひ路)

【語釈】○暮深き…とつぷりと日が暮れ、すっかり夕暮れになった様子。「くれふかき門田の面のなはしろに霞の澗みぞを先引きてけり」(為尹千首・田家春・89)。「袖はらふ雪のふきかけや無／門さしこもり暮深き山」(池

田千句第一百韻・宗碩／成□・11／12)。○かよひ路…恋人のもとに忍んで行く路。「露」が付されることにより涙をも思わせ、終わってしまった恋の様子が暗示される。「みるもうし露のかよひぢあとたえて契ふりゆく庭のよもぎふ」(慕風愚吟集・逢不逢恋・330)。「ちらばちれぬるとも分けん花もなき夏野の草の露の通ぢ」(新明題和歌集・夏・

行路夏草・中院通茂・1552)。○跡絶えて：通った跡もなくなつて。「跡たえてあさぢがすゑになりけりたのめしやどの庭の白露」(新古今集・恋四・経房卿家歌合に、久恋を・二条院讃岐・1286)。「柴の戸さひし冬のくれかた／たまさかの雪のかよひちあと絶て」(三島千句第四百韻・18／19)。

【付合】時刻を夕暮れ時とし、かつて通った人もはや来ない、静寂の風景を表現する。「暮深き」を秋の情景として詠む歌・句は少ないが、宗祇は「露」を使用して秋の場面設定をし、失った恋のイメージも添えている。

【二句立】とつぷりと日が沈んだ暮れ方、露の降りた通い路には、もう通ってくる人の跡もなく、涙が落ちることだ。

【現代語訳】垣根が粗いゆえ、通り過ぎてくる風によつて、すすきの穂が散る、そんな時期がきた。とつぷりと日が沈んだ暮れ方、深い露に濡れた通い路には、もう通ってくる人の跡もなく、涙が流れ落ちることだ。

(初折・表・八) 暮深き露のかよひ路跡絶えて

八 幾重の霜ぞ見るもすさまじ

【校異】一句：⑧欠 いくへ…⑨⑩いくえ 霜…⑬霧(「霜」を朱訂正) そ…④に ⑮□(破損) 見るも…⑮見るにし…⑮□(破損)

【式目】冬(霜) 霜(降物・可隔三句物) 冷(依物不可為秋之由雖有一儀、秋季大切之時強用之事有例。) (肖柏追加) ※「連珠合璧集」では、「すさまじ」は秋の語句であるが、この句においては冬の語句である。

【語釈】○幾重の霜…何重にも重なった霜。恋人が通つて来なくなつてから、長い年月が過ぎたことを、霜が幾度も重なり置いたという表現で表している。「さ夜ふけてこゑさへさむきあしたづはいくへの霜かおきまさるらむ」(新古今集・冬・613・道信朝臣)。○見るもすさまじ…目にするのも寒々しく感じることだ。「かた山の秋の故寺鐘なりて／霜夜のこすゑ見るもすさまじ」(葉守千句第九百韻・宗祇／肖柏・31／32)。

【付合】前句にある夕暮れ時の「露」に、「霜」を付けることで、語句を相対させると同時に、一日のうちでは、夕暮

れから夜分に、季節は秋から冬に、時を進めた。又「幾重」という表現によっても、前句で描写された人の訪れから、久しく時がたったことも示唆した。前句では、通い路の秋草が夕露に濡れているが、付句では、通い路の草は冬になって枯れ、夜にはそのまま凍って霜が降りている。時の経過を巧みに示す付合である。

【一句立】 どれほど重なり置いた霜なのか、見るだけでも寒々しいことだ。

【現代語訳】 とっぷりと日が沈んだ暮れ方に、露に濡れた通い路には、もう通ってくる人の形跡もなく、その頃からどれほどの時が経って重なり置いた霜であるのか、今は見るだけでも寒々しいことだ。

(初折・裏・一) 幾重の霜ぞ見るもすさまじ

九 遠近の鐘に目覚めていづる夜に

【校異】 夜に：⑭夜□(破損)

【式目】 雑 鐘只一、尺教一、入逢一、異名二(一座四句物) 夜分(夜)

【語釈】 ○遠近の鐘：遠くからも近くからも聞こえてくる鐘の音。「霜：鐘の声 鐘は霜にひくくなり」(八雲御抄・天象部)。「更るから霜冴まざる月の影／鐘もあまたの遠近の声」(文安月千句第四百韻・正信／専順・37／38)。「月ふくる枕の鐘に夢さめて／いそく別に秋は物かは」(看聞日記紙背応永二十九年三月二十八日賦何人連歌・椎野／沙弥行光・51／52)。「○いづる夜に：外に出た夜に。「たひまくらふかきもしらすいづるよに／つかれしうまそすすみかねたる」(住吉千句第四百韻・5／6)。

【付合】 前句の「霜」に「鐘」を付けた。「鐘トアラバ、……霜」(連珠合璧集)。鐘に目覚めて、なぜ外に出たのかは、この付合では定かではないが、しらじらと霜が置く寒夜であっても、時を知り、出ていかねばならない状況である。

【一句立】 そここの鐘の音に目が覚め、外に出た夜には。

【現代語訳】 あちらこちらの鐘の音に目が覚め、外に出た夜、地面には霜が幾重にも重なって、なんと深く置いておくことか、それを目にするだけでも寒々しいことだ。

(初折・裏・二) 遠近の鐘に目覚めていづる夜に
十 しづまるやどり人や寝ぬらん

【校異】 ナシ

【式目】 旅(やどり) 宿(只一、旅二、やどり此外にあり。鳥のやどり・露のやどりなどの間に又有べし。) 人(人倫) 夜分

【語釈】 ○しづまる…人音がしなくなる。寝静まる。「わたりせぬ水や霞のみほならん／月ふけ人は声そしつまる」(延徳三年十月十五日何木百韻・宗祇／玄清・47／48)。○やどり…旅先の宿。「とまるべき宿りを月にあくがれて明日の道行く夜半の旅人」(六華集・秋・大納言為兼・677、「とまるべきやどをば月にあくがれてあすの道ゆく夜はの旅人」の形で玉葉集¹¹⁴²に入る歌である)。○人や寝ぬらん…人は寝ているのだろうか。「おもひかねたつぬる道にさ夜深て／とはしいまはと人やねぬらむ」(三島千句第一百韻・25／26)。

【付合】 鐘の音に目覚めて外に出た、その宿を付けたことで、旅の立出の様子と状況が決まる。そこから「いづる」も単に外に出るのではなく、急ぎ立出しようと宿を離れていく様となる。

【二句立】 静かになっている宿、人は寝てしまっているのだろうか。

【現代語訳】 あちらこちらから聞こえる鐘の音で目覚め、旅路を急いで立出した夜に、後にした宿は静かで音もしない。他の人はまだ寝ているのだろうか。

(初折・裏・三) しづまるやどり人や寝ぬらん
十一 たれとなく涼しき月に声ふけて

【校異】たれとなく…⑦たれとなく。なく すゝしき…④すつ敷 こゑ深て…④夢さめて

※底本と⑤⑥は「こゑ深て」であるが、漢字を使用する他本は「更」を当てる。ここは注釈本文の表記を「ふけて」とひらがな表記にした。

【式目】夏(涼しき)「夏の末の心、すゝしき」(連珠合璧集) 夏月有明 (一座二句物) 音声に響(可嫌打越物)

【語釈】○たれとなく…誰ともわからないような。誰だということもなく。「誰となくおぼろに見えし月影にわけける心」を思ひしらなん(後撰集・恋三・ふぢつぼの人人月夜にありきけるを見て、ひとりがもとにつかはしける・きよただ・73)。「たれとなくこころに人のまたるやながむるつきのさそふなるらん」(続古今集・秋上・慈鎮大僧正・414)。○涼しき月…「涼しき」に「たれとなく(声)す」と掛けている。「夏のははずしき月は久かたのかつらのかげに秋かぜやふく」(沙玉集II・夏月・60)。○声ふけて…人の話し声や、何かの物音が夜が更けたことを知ること。

「宿直申し」の声で夜も更けたと判断する例が多いが、ここでは宿の人々の話し声が小さくなってきたことから、夜が更けて寝静まったと判断している。「こよひまたとのゐ申の声更けて三世の仏の名をぞ聞きつる」(正平二十年三百六十首・仏名夜闌・女房(後村上院)・194)。「きりくすかたふく月に声更て／なくともなに、秋をうらみん」(河越千句第一百韻・宗祇／道真・71/72、70/71の付合例は、本百韻第六句「薄散る頃」の語釈に既出)。

【付合】さつきまで宿のどこかの部屋から聞こえていた声がかすかになり、いつしか消えた様を形容する。夜の時間の流れを詠んで巧みである。

【一句立】涼しい夏の下で、誰ともわからない声が聞こえているうちに、次第に夜更けになって。

【現代語訳】涼しい夏の下、誰の声ということもわからないが、喋り声が聞こえているうちに、次第に夜更けになって。今はもう静かになっている宿、人は寝てしまっているのだろうか。

【備考】月と月とは、七句可隔物であり、第三に冬の月が出た後、ここで夏の月を出している。

なお、『下草』の伝本中、草稿本と位置付けられている龍谷大学本に本百韻十・十一の付合が入る(雑上755・756)。

龍谷大学本は、延徳二年冬から、延徳三年春頃の成立と考えられており、この百韻とほぼ同時期となる。

(初折・裏・四) たれとなく涼しき月に声ふけて

十二 水にぞ山の心をも知る

【校異】 ナシ

【式目】 雑 水(水邊・用) 水与水(可隔五句物) 山(山類・体) 山与山(可隔五句物)

【語釈】 ○水…ここは山中の水の流れを意味する。水の素晴らしさについては、『徒然草』二十一一段に「岩に砕けて清く流るゝ水のけしきこそ、時を分かずめでたけれ。」とあり、心敬『ひとりごと』にも、「水程感情ふかく清涼なる物なし。春の水といへば心ものびらかに俤もうかびて、なにとなく不便也。夏(は)清水の本、泉の辺、又冷えさむし。秋の水と聞けば、心も冷々清々たり。」とある。○山の心…山を擬人化した表現で、山本来の姿やあり方。「みよしののやまのころは今日やしるいつかはゆきのふらぬひはありし」(躬恒集・冬・95)。「草かれて木のは落ちたるこのごろの山の心や冬こもるらし」(伏見院御集・冬山・2263)。季節ごとに立ち現れる、その山ならではの自然の姿を、山の持つ「心」と表現していよう。さらに、宗祇の少し前に、正徹が「しつかなる山の心を今は我ともとするまですみなれにけり」(草根集・山家・1384・永享二年正月六日詠、国歌大観本では初句「閑なる」と、山家に住むことで、山の心に寄り添いながら生きる境地を詠んであり、宗祇にも次のような表佐千句の句がある。「人ことにうき世はしれと猶住て／山のこゝろにはちよあらし／墨染の雲は袖をやさそふらん」(表佐千句第六百韻・甚昭／紹永／宗祇・37／38／39)。俗世に住み続けることは、山の心に恥ずるものであり、そこからまた出家を勧める句の流れである。また、桜井基佐句集には、次のような例がある。「山のこゝろそ身におほえぬる／帰りても花とおきふすおもかけに」(桜井基佐句集(書陵部蔵斑山文庫本)・139／140)。「すてはつる世にもしはしはかへりきて／山のこゝろを人につけはや」(桜井基佐句集(書陵部蔵斑山文庫本)・1181／1182)。このような同時代の歌例、句例から見ても、山の自

然の真の姿、その清澄で心洗われる雰囲気、山の庵に住む隠者が感じ、山と一体化して我が身にまとうまでになっている、というあり方が理想とされ、その境地を表現せんとして詠まれていると思われる。

【付合】前句の「声」を、水音ととり、山の水へとつなぐ。水の音は漢詩では「水声」である。「鳥去鳥来山色裏 人歌人哭水声中」(杜牧「題宣州開元寺水閣」)。「涼しさは外山の谷の水の声秋にまさきをしほる松かせ」(草根集・納涼・3445)

【二句立】水によってこそ山の心をも理解できるのだ。

【現代語訳】誰ということもわからないが声がして、涼しい夏の月の下、夜が更けていく。あれは山水が流れる音だったのだ。そんな水を感じることで、山の素晴らしきをも理解できるのだ。

【備考】出家し俗世から離れ、山に住むことは、希求すべき理想と考えられ、宗叡から心敬、宗祇にかけて「あらまし」(出離の希望)として多く詠まれた。「人もし折々深きころざし／わがあらましは大原の奥」(宝徳四年千句第六百韻・51／52・金阿／宗叡)。「いつかはと思ひ馴ては過る身に／我あらましは奥のおく山」(初瀬千句第八百韻・39／40・日晟／弘阿)。そのような隠者が日々触れるのは山の清澄な自然であり、「山の心」に常に触れ深い山に沈潜して生きる隠者の姿こそ、出家した人間の理想的な暮らしぶりであるとする意識が句の根底に存している。

(初折・裏・五) 水にぞ山の心をも知る

十三 風をのみ花は恨みじ吉野川

【校異】花は…③花に うらみし…⑦⑧うらみん ⑩恨みしミイ(右傍注朱) ⑬うらみしミ(右傍注朱) ⑮打見しウツミ

【式目】春(花) 風与風(可隔五句物)

【語釈】○風をのみ…花びらを散らす風だけを。風は花を散らすことから、人々にうとまれる。「たちかへり風をのみこそうらみつれふかずは花もちらじと思へば」(続千載集・春下・花歌の中に・中務卿恒明親王・148)。○花は恨みじ

：花は恨みに思うまい。人が花を散らすと恨みに思う風を、花は恨まないだろうと類推する。「吉野川」の語釈、又【付合】参照。「をしむとて何か世中とどまらんおもひかへして花は恨みじ」(雪玉集・惜花・6046)。「今はただ風をいへは吉野川岩こす花のしがらみもがな」(式子内親王集・正治百首歌たてまつりける時・334)。○吉野川：大和国、現在の奈良県吉野郡を流れる川。大台ヶ原から宮滝、五条市を流れ、和歌山県に入り紀ノ川となる。前掲の式子内親王歌からもわかるように、吉野山の桜が、風に散り、吉野川に流れるその美しさは、類稀なものとして詠まれている。「芳野河花のしら波ながるめり吹きにけらしな山おろしの風」(新拾遺集・春下・河上落花といふことを・前參議教長・156)。

【付合】前句の「水」の情景を、花が一面に散り流れていく吉野川の様子にとりなした。前句の「水」が、「山の心」を表す情景であることから、花の名所である「吉野」を流れる「吉野川」の、花の散る様の美しさが、この時期の「山の心」として水に表現されたと付けている。校異に見られる⑦⑧本文、また⑪⑬傍注は、付合の前句の理解がなされないまま写されたものである。

なお、この付合は、山・花・風と人を囲む自然界の景物が擬人化された形で詠まれていることも注意される。

【一句立】ここでは、花びらを吹き散らす風だけは、花は恨みに思うまい。風に散る花びらが水面に散り敷いて流れる、吉野川のこの美しさよ。

【現代語訳】川の水の流れる様子によってこそ、山の自然の真に美しい姿もわかるのだ。だから、ここでは、花びらを吹き散らす風だけは、散っていく花は恨みに思うまい。風によって、山の桜の花びらが、水面に散り敷き流れてゆく、吉野川のこの美しさよ。

(初折・裏・六) 風をのみ花は恨みじ吉野川

十四 はやくもかはる故郷の春

【校異】かはる…⑧⑫かわる

【式目】春 故郷(名所・たゞ古郷引合て一、旅に二。) (一座二句物) 「故郷トアラバ、(故郷に品々あり。ふるぎ都を故郷と云。又今すむ里のふりたるをも云。又旅に出し我方を故郷とも云) : 吉野山」(連珠合璧集)

【語釈】○はやくもかはる…すみやかにうつろうこと。「はやく」は吉野川の急流を示唆する言葉でもある。「吉野河水の心ははやくともたきのおとにはたてじとぞ思ふ」(古今集・恋三・よみ人知らず・651)。「やまおろしさくらながるよし野河はやくもはるのくれてゆくかな」(千五百番歌合・春四・藤原忠良・456)。「ながれてはいかがたのまんよしの川早くもかはる人の契りを」(藤葉集・恋下・権律師尚俊・590)。○故郷の春…吉野を故郷ふるさととす。今は忘れ去られ、人も通わない寂しい旧都。「ふるさととはよしのの山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし」(古今集・冬・よみ人知らず・321)。「老はた、花見る友の数ならて／さひしくをくる古さとの春」(因幡千句第二百韻・専順／堯午・27／28)。

【付合】前句の「吉野」から「故郷」を付けた。

【二句立】もう次の季節に移り変わろうとしている、故郷の春。

【現代語訳】花びらを吹き散らす風だけは、花は恨みに思うまい。風に散る花びらが水面に散り敷いて流れる、吉野川のこの美しさはどうだ。だが、吉野川が速く流れていくように、旧都、吉野の春もすみやかに移ろっていく。

(初折・裏・七) はやくもかはる故郷の春
十五 つれてこし契りも雁の別れ路に

【校異】ナシ ※注釈本文表記に「別れ」と「れ」を追加している。

【式目】秋(雁) 雁(春一、秋一、残雁春・秋の中に有べし) (一座二句物)

【語釈】○つれてこし…一緒にやってきた。「北へ行くかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる」

(古今集・羈旅・題しらず・よみ人知らず・412)。○雁の別れ路：「雁」に「仮」を掛ける。雁は秋に北方から飛来し、春に北に帰って行く。「別れ路」は、別れていく道、または死に別れていく道。「秋霧に峰のかすみをたちかへてはれぬ思ひの雁のわかれ路」(宗良親王千首・峰帰雁・97)。

【付合】「故郷」に「雁」を付けた。なお、一句では、秋の句であるが、付合では、雁は春の帰雁となる。

【二句立】一緒に南にやってきて、一緒に北へ帰ろうと言ったその約束も、かりそめのものになってしまった雁の別れ路では。

【現代語訳】雁の群れが連れだつてやってきたが、また一緒に北に帰ろうと言っていたその約束も、かりそめのものになってしまった。その別れ路では、雁が去つて、故郷の春はすみやかに移ろっていく。

【備考】本句は、主題・語句の一致から、古今集412歌を念頭に置いての句と考えられる。古今412歌には、次のような左注がある。

このうたは、ある人、をとこ女もろともに人のくにへまかりけり、をとこまかりいたりてすなはち身まかりにければ、女ひとり京へかへりけるみちにかへるかりのなきけるをききてよめるとなむいふ。

すなわち、一緒に他国に行った男女があり、男が現地で死に、女が一人で京に帰る際に、雁の鳴くのを聞いて詠んだ歌とされている。『古今和歌集両度聞書』は、412歌について「心は左注に見えたり。あはれふかくや」と注しており、左注から、一緒にやってきたその時の、一緒に帰ろうという約束が、片方の死によって果たされないものとなった、その悲しみを読み取ることになる。

(初折・裏・八) つれてこし契りも雁の別れ路に

十六 浮かべる雲の世をばたのまじ

【校異】うかへる…③うかめる 世をは…②世をも ①⑭世とも

【式目】 雑 雲 (可隔三句物) 世只一 浮世中の間に一 (一 二座五句物)

【語釈】 ○浮かべる雲…浮雲。「我が身をば浮かべる雲になせればぞつく方もなかりける」(新千載集・哀傷・自覚浮雲無所着といふことを・大江千里・2168)。例歌は、大江千里の句題和歌であり、『白氏文集』巻十七「答元八郎中、楊十二博士」より一句(「身覚浮雲無所着」)を詠む。「うかへる雲のそらのはかなさ／ゆきとまるかきりは誰もしらぬ身に」(『宇良葉』内本式連歌・654／655)。「うかべる雲は人の道かも／迷ふ身をいづくの山と定めまし」(新撰菟玖波集・雑五・式部卿邦高親王・3325／3326)。○世をばたのまじ…この世などは頼みにするまい。「きえぬればあともこのさぬ水のあわのかりのすがたの世をばたのまじ」(拾藻鈔・雑下・随喜功德品、世皆不牢固如水沫瀉焰・476)。前句との関係では「契り」と「世」の組み合わせから「世」に「男女の仲」の意味も込められているか。

【付合】 雁が別れていく別れ路が空にあることから、空に浮かぶ雲につないだ。前句の「雁」を「仮」と掛けて「世」につなぐ。恋のイメージを持つ「契り」から「世」につなぐつながりもある。

【一句立】 空に浮かんでいる雲のような、捉えどころなくはかないこの世など、頼みにはすまい。

【現代語訳】 一緒に連れだつてやつてきた、その約束も、かりそめのものであつて、雁が別れて行くその道筋の空に浮かんでいる雲のような、捉えどころなくはかないこの世など、頼みにはすまい。

(初折・裏・九) 浮かべる雲の世をばたのまじ

十七 道ならぬ身はわびぬるもつらからで

【校異】 道…⑪道浮 (左右の傍注朱) ⑫常 ⑬道常 (左傍に朱点、右傍注朱) わひぬるも…①わひぬる

【式目】 雑 身 (人倫)

【語釈】 ○道ならぬ身…「道」の部分、「常」とする伝本(小松天満宮「集懷紙本」と、校異として「常」を記す伝本(大阪天満宮関係諸本)がある。「常」の方が理解が容易であるが、ここは底本のように本文を読んでも、近い意

味になるか。進むべき道の定まらない、よるべないわが身。「今ぞしる浦こぐ船の道ならぬ旅さへ風の心なりとは」(瓊玉集・弘長三年八月の風によりて、御京上とどまらせ給ひて後、をのことも題をさぐりて歌よみ侍りける次に、浦舟といふ事を・434)。「うかべる雲は人の道かも／迷ふ身をいづくの山と定めまし」(新撰菟玖波集・雑五・式部卿邦高親王・3325／3326)。「○身はわびぬる…わが身は思うようになっていない、それゆえ困ってしまっているという状態。「萍をたよりと舍る露もうし／わひぬる身こそ秋の物なれ」(熊野千句第四百韻・宗祇／専順・85／86)。「○つらからで…辛くはなくて。「つらし」は「自分の置かれた状況が耐え難く思われる」(『角川古語大辞典』)状態。「いたつらになさむもいまはつらからで／あさまのけふりむねにのこさし」(『宇良葉』内本式連歌・679／680)。

【付合】「身覚浮雲無所着」の句の内容を付けている。

【二句立】よるべないこのわが身は、思うようになっていなくても、辛くはなくて。

【現代語訳】空に浮かんでいる雲のような、捉えどころなくはかないこの世など、頼みにはすまい。そんな世に生きるよるべないこのわが身は、思うようになっていなくても、辛くはなくて。

(初折・裏・十) 道ならぬ身はわびぬるもつらからで

十八 よし古りぬともかかると蓬生

【校異】とも…⑮るも

【式目】雑

【語釈】○よしととも…もしもとして。「からでみんそをだに秋の花のため草のみどりはよしふかくとも」(延文百首・進子内親王・130)。「○古りぬ…年老いる。「ふみなれしおどろの道はむかしにて蓬が門に身こそふりぬれ」(通勝集・寄草述懐・902)。「○蓬生…蓬が生茂る荒れ果てた場所。「いかでかはたづねきつらん蓬ふの人もかよはぬわがやどのみち」(拾遺集・雑賀・よみ人しらず・1203)。

【付合】前句で表した、よるべないわが身のありさまを、付句で諦観を込めて見通す。

【一句立】もしも古びてしまったとしても、このような蓬生の荒れた場所に似つかわしいわが身なのだから。

【現代語訳】よるべないこのわが身は、思うようになっていなくても、辛くはなくて。もしも老いてしまったとしても、このような蓬生の荒れた場所に似つかわしいわが身なのだから。

(初折・裏・十一) よし古りぬともかかるとる蓬生

十九 うつろへば露こそ月の都なれ

【校異】うつろへは…③うつろへり ⑦⑧うつろはぬ⑧は頭注「月の都 都三ツの外なるへし月宮殿の事也□都に外なる也」あり ⑪うつろへは(傍注朱) ⑬うつろへは ⑭移へし 都…⑤⑥勤

【式目】秋(露・月) 月与月(七句可隔物) 露(降物・可隔三句物)

※第三句(冬月)、第十一句(夏月)、第十九句(月)と式目を守りつつ月が詠みこまれている。

【語釈】○うつろへば…色あせると。前句の蓬が、秋も深まり枯れてきていることをいう。秋が深まれば、気温も下がり、露は日一日と葉に繁く置くようになる。「うつろへばにほひまされる秋の菊花に日数ををしてみてやみむ」(宗祇集・秋・五十首歌中に、残菊句・144)。○露…尋ねる人もいない荒れた蓬生の宿は、生い茂る雑草に露が置き、月がその様子を照らす。「すみなれていく夜の月かやどるらむさとはむかしの蓬生の露」(新後撰集・秋下・遊義門院大藏卿・380)。「蓬生の露のみふかき古郷にもとみしよりも月ぞすみける」(新後拾遺集・秋上・弘安百首歌に・前大納言為兼・369)。「きりくすこゑたてそむる夕月夜／ふけなはいかによもきふの露」(葉守千句第二百韻・肖柏／宗友・31／32)。○月の都…月世界にあるという都、または月そのもの。ここは荒れた蓬生に置く露に、月が美しく映るさまを言う。「ならへみん秋は千草の露にさく花の洛と月のみやこと」(草根集・都月・6541・宝徳二年八月二十五日詠)。「嵐時雨の音騒ぐ空／秋暮れぬ月の都やあれぬらむ」(新撰菟玖波集・秋下・1064／1065・印孝法師)。「はてやかなしきあ

めに住人／明初る月の都のかすむ夜に」（文明十二年八月何路百韻「月を風」・宗作／宗祇・42／43）。「旅ねしつけき山そおきうき／かへるさを月の宮古に忘はや」（老葉・旅連歌・733／734）。

【付合】「蓬生」に「露」を付けた。「蓬トアラバ、よもぎふともいふ。……露をはらふ」（連珠合璧集）。前句の「蓬生」の荒れたイメージに、付句で「都」を使うことで対比し、また露の美をきわだたせている。

【二句立】草枯れの秋が深まってくと、置く露こそが、月を宿し、まるで月の都のように実に美しく輝くようになるのだなあ。

【現代語訳】たとえ古びてしまっているとしても、このような蓬生の荒れた場所が、枯れて色あせると、そこに置く露こそが、月を宿し、いわば美しい月の都の風情となるのだ。

和歌の引用は、日本文学 *www* 図書館内『新編国歌大観』によるが、『草根集』は『新編私家集大成』により、『万葉集』は西本願寺本による。

【訳注引用文献典拠一覧】

表佐千句：古典文庫『千句連歌集四』所収大東急記念文庫本

老葉（毛利本）：『連歌大観一』

愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）所収版本

文安月千句：古典文庫『千句連歌集二』所収静嘉堂文庫本

梵灯庵袖下集：『島津忠夫著作集第五巻 連歌俳諧資料』（二〇〇四・和泉書院）

桜井基佐句集：古典文庫『桜井基佐句集』

紹巴亡父追善千句：日文研DB

看聞日記紙背連歌類：『図書寮叢刊 看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇・養徳社）

池田千句：『千句連歌集七』所収静嘉堂文庫本

三島千句：『千句連歌集五』所収鶴見大学本

延徳三年十月十五日何木百韻：『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

徒然草：新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（一九八九・岩波書店）

ひとりごと：『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）

〔題宣州開元寺水閣〕：『新釈漢文大系詩人編9 杜牧』（二〇二〇・明治書院）

因幡千句：『千句連歌集四』所収木藤才藏氏藏本

白氏文集：新釈漢文大系『白氏文集三』（一九八八・明治書院）

類聚名物考：国際日本文化研究センター古事類苑データベースによる

八雲御抄：『八雲御抄の研究 枝葉部言語部』（一九九二・和泉書院）

古今和歌集兩度聞書：片桐洋一『中世古今集注釈書解題三』（昭和五六・赤尾照文堂）

文明十二年八月何路百韻「月を風」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

【参考文献】

『連歌大観一』内『下草』解説

※本稿はJSPS科研費JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。